

ジョン・リリーの『エンディミオン』とギリシャ神話

大 芝 香 織

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第五十九号抜刷

2023（令和5）年3月

ジョン・リリーの『エンディミオン』とギリシャ神話

大 芝 香 織

1. 序論

ジョン・リリー (John Lyly) の『エンディミオン』 (*Endymion, The Man in the Moon*) はエリザベス女王の前で上演した劇として知られている。劇の上演についてわかっていることはセント・ポールズ少年劇団 (The Children of Paul's) が聖燭祭 (Candlemas Day : 2月2日) にロンドンのグリニッジで女王の前で上演されたことである。E.K. チェンバース (E.K. Chambers) によると、『エンディミオン』のプロローグとエピローグは宮廷での上演のために書かれていることは確かであるが、上演された年は、研究者の間でも意見が異なっているようである。1579年の秋という説もあれば、1586年の聖燭祭に上演された説もあるという。しかし、チェンバースは上演された年を1588年と考えている。その根拠は、セント・ポールズ少年劇団による聖燭祭での上演は1588年のみしか記録が残っていないからである(415)。また、フィリッパ・ベリー (Philippa Berry) は上演時期を1586年と考え、『エンディミオン』の執筆時期を1584年から1585年の間としている(126)。

『エンディミオン』は、宮廷人であるエンディミオンが月の女神であるシンシアに恋をしていることを親友のユーメニデス (Eumenides) に打ち明ける場面から始まる。月の女神であるシンシア (Cynthia) に恋をするエンディミオンをユーメニデスは異常であると断言し、心配するが、エンディミオンのシンシアへの想いは止まらない。エンディミオンを慕うテルス (Tellus) はエンディミオンのシンシアへの想いを知り、自分に対する不実であると怒り、彼への復讐を決意する。テルスは魔女であるディプサス (Dipsas) にエンディミオンの復讐を依頼する。ディプサスの魔法により、エンディミオン

は40年もの間、眠り続けることになる。眠っている間、エンディミオンは年を取る。エンディミオンが長い眠りから覚めないことを知ったシンシアは、学者たちとユーメニデスにエンディミオンを目覚めさせる方法を探しに旅をさせる。旅の途中でユーメニデスが見つけた魔法の泉の底に書かれたメッセージを解読すると、シンシアのキスによりエンディミオンが目覚めることがわかる。シンシアが眠るエンディミオンにキスをすると、エンディミオンは目覚め、シンシアの寵愛により、眠っていた40年分、若返る。

この劇作において、シンシアがエリザベス女王の寓意であることは、明白である。ベリーは、劇が上演されてた1580年代に書かれたサー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh) の書いた長い詩の中で、エリザベスと月が比較されており、その影響を受けているという (126)。女戦士ダイアナとして表象されてきたエリザベス女王を月の女神であるシンシアとして表象するリリーの目的は、エリザベスのイコノグラフィーの発展から、ローマ神話のダイアナの攻撃性や軍事との関連性を取り除くことを試み、エリザベスを黙想的な人物として表すことであった (Berry 112-14)。

リリーはギリシャ神話を用いて劇を書いていた。しかしながら、その劇は、必ずしも、神話に忠実であるというわけではなく、神話のモチーフを利用して、新たな作品を生み出していたと考える方が正しいようである。リリーの『エンディミオン』の主人公は神話で語られてきたエンディミオンと異なる点がある。本稿では、リリーがどのように神話を用いて劇作を作っていたのか、神話がどのように劇に反映されているのかを再考し、神話と異なる点には、劇作家のどのような意図があったのかを考察したい。

2. 神話のエンディミオン

リリーの『エンディミオン』は、ギリシャ神話より描かれていたエンディミオン (EndimionあるいはEndymion, 日本語ではエンデュミオンと記載されることもある) を改訂したものがある。神話ではエンディミオンは二度と目覚めることなく、深い眠りに落ちる。いくつかの神話では、月の女神がエ

ンディミオンにより 50 人の子どもをもうけたという説もある (Berry 126)。

リリーの『エンディミオン』と神話での話には大きな差異がある。その理由についてマイケル・ピンコム (Micheal Pincombe) は、観客が慣れ親しんだ題材を全く異なる方法で提供することで観客を驚かせることをリリーは好んでいた。『エンディミオン』について、ロンドンの宮廷でのリリーの観客は宮廷風の劇のアイデアに騙されたに違いないと述べている (87)。また、リリーの観客たちが慣れ親しんでいたエンディミオンは、貞節な女神が彼女の誓いを破り、人間に情熱的な恋をするという話であるという。具体例としてピンコムは、オウィディウスの『エレジー』(Elegies) の中での “The Moone sleeps with *Endemion* everie day./Thou art as faire as shee, then kisse and play.” (1.13. 43-44) ¹ という文を挙げ、月の女神は彼女の性欲を恥じており、それゆえに、秘かに自分の性欲をみたしていた。彼女の眠ったままの性の相手が知ることもないままに。この説話こそが、リリーの観客が最も親しんだものであっただろうと述べている (88)。

つまり、リリーの観客たちは、『エンディミオン』という題名だけで、おそらく月の女神と人間のエンディミオンとの性的関係を描いた作品だと想定していたということになる。リリーの描く月の女神、シンシアは性愛とは無縁の女神である。しかしながら、リリーの『エンディミオン』は神話をまったく無視したものではなく、神話を反映し、作品を書いていたと考えられる。この項では、リリーが神話をどのように作品に反映していたかを考察するために、神話のエンディミオンと月の女神との恋について再考し、その多様性と特徴を見出すとともに、リリーの『エンディミオン』に投影された箇所について論じていきたい。

エンディミオンと月の女神との関係性は神話等の記述においては、明白ではない。月の女神がエンディミオンに恋をし、エンディミオンが眠りに落ちたということは、はっきりしているが、眠りに落ちた理由も定かでない。たとえば、アポロドーロスの『ギリシャ神話』では、エンディミオンの出自が記されている。

カリュケーとアエトリオスから一子エンデュミオンが生れた。彼はテッサリアーからアイオリス人を率いてエーリスを創建した。一説によれば彼はゼウスの子であるという。彼は人にすぐれて美貌であったが、月神が彼に恋した。しかしゼウスが彼にその欲するところを授け、彼は、不老不死となって永久に眠ることを選んだのである。(43)

アポロドーロスの『ギリシャ神話』ではエンディミオンは、ゼウスの子である可能性が示唆されている。また、エンディミオンの美貌に月神が恋をしたことは明白であるが、エンディミオン自身が月神に恋をしていたかは、わからない。さらに、不老不死となって永久に眠ることを彼自身が選択したことが言及されているが、その理由については全く触れられていないのである。

一方で、神話ではないが、リリーが精通していたと考えられるキケロー作品の一つである『トゥスクルム荘対談集』の一節に、以下のような述べられている。

死を軽いものとする人々は、死が眠りに酷似していると主張する—しかし、六十歳を過ぎれば残りを眠って過ごすという条件で九十歳まで生きたいと思う者がいるだろうか。そんなことは、本人のみならず家族も望みはしないだろう。伝説に耳を傾けるなら、エンデュミオンは、いつかは分からないが、カーリアのラトモス山で眠りに落ちて以来、まだ目覚めていないと思われる。それで、眠っているところを接吻できるよう、エンデュミオンを眠らせたと考えられている当のルーナが「困っている」時に、君はエンデュミオンが心配していると思うかね。感覚をまったくもたない彼が、いったいどうして心配するというようなことがあるだろうか。君は死の類似物である眠りをもち、毎日それを衣服のように身につけ、死の類似物には何の感覚もないこと分かっているというのに、死に感覚がないことを疑うのか。(76)

上記の記述では、死と眠りの類似性について論じられている。死とは感覚が

ないことであり、眠りも感覚がないことである。ここで例として挙げられるのが、エンディミオンである。エンディミオンの伝説について、アポロドーロスの『ギリシャ神話』と異なるのは、彼の眠りがルーナ（月の女神）によってもたらされたものであるという点である。また、月の女神の目的が眠っている間に、エンディミオンに接吻できるようにするためというエロティックなものである。つまり、エンディミオンの眠りは、月の女神の性的な目的を果たすためのものであり、眠っているエンディミオンには、感覚がないため、その快樂は、月の女神の一方的なものであることがわかる。

このように、エンディミオンが眠ることになったのが、自発的であったのか、月の女神に眠らされたのか、また、エンディミオンが眠る目的にも統一性がない。さらに、オウィディウスの『名婦の書簡』の中にも月の女神の性愛を暗示する次のようなエンディミオンに関する記述がある。

The moon for the most shed me a tremulous light as I swam, like a duteous attendant watchful over my path. Lifting to her my eyes, "Be gracious to me, shining deity," I said, "and let the rocks of Latmos rise in thy mind! Endymion will not have thee austere of heart. Bend, O I pray, thy face to aid my secret loves. Thou, a goddess, didst glide from the skies and seek a mortal love; ah, may it be allowed me to say the truth! – she I seek is a goddess too. To say naught of virtues worthy of heavenly breasts, beauty like hers falls to none but the true divine. After the beautiful face of Venus, and thine own, there is none before hers; and, that thou mayst not need to trust my words, look thou thyself! As much as all the stars are less than thy bright fires when thy silvery gleam goes forth with pure rays, so much more fair is she than all the fair. If thou dost doubt it, Cynthia, thy light is blind."

(Ovid, *The Heroides* 18, 'Leander to Hero', 249)

レアンドロス (Leander) が夜に海を渡って恋人ヘーロー (Hero) へ会いに

行くときの場面である。ここでは、レアンドロスは月をシンシアと呼んでいる。レアンドロスは泳いでいる最中に自分の震える表情を隠す月に、彼を助けるよう求めている。エンディミオンに関する記述は、レアンドロスが彼の秘密の恋を助けてもらうために月に語りかける場面である。レアンドロスは月に、ラトモスの岩々を思い起させ、エンディミオンはお前の心を禁欲にはさせないだろうと言っている。レアンドロスはシンシアにエンディミオンとの秘密の恋を思い起こさせることにより、同情を獲得し、自らの秘密の恋を助けてもらおうとしている。ここでは、エンディミオンと月神の恋がレアンドロスとヘーローの恋と同じように「秘密の恋」であることが強調され、シンシアの性愛が暗示されている。また、自分の愛するヘーローを女神であると述べるレアンドロスは、女神に恋する人間という立場を確立している。

月の女神とエンディミオンの恋「秘密の恋」であるにも関わらず、それを邪魔する人物がいたことが、『ロドスのアポローニオス』の中に明記されている。

And the Titanian goddess, the moon, rising from a far land, beheld her as she fled distraught, and fiercely exulted over her, and thus spake to her own heart:

“Not I alone then stray to the Latmian cave, nor do I alone burn with love for fair Endymion; oft times with thoughts of love have I been driven away by thy crafty spells, in order that in the darkness of night thou mightest work thy sorcery at ease, even the deeds dear to thee. And now thou thyself too hast part in a like mad passion; and some god of affection has given thee Jason to be thy grievous woe. Well, go on, and steel thy heart, wise though thou be, to take up thy burden of pain, fraught with many sighs.” (*Apollonius Rhodius* 299)

魔女のメディアが故郷から逃げているところを月の女神が見ている上記の場面では、月の女神はタイターニアと呼ばれる。月の女神がエンディミオンに

対する愛を打ち明けるのは、彼女自身への心の内のみである。つまり、劇であれば、独白となるだろう。月の女神はエンディミオンを洞穴に隠し、一人でエンディミオンに恋い焦がれていたことが明記されている。月の女神とエンディミオンとの「秘密の恋」を暗示させているのかもしれない。しかし、その月の女神が述べているように、エンディミオンを愛したのは、彼女だけではなかった。そして、月の女神とエンディミオンの仲を魔力によって邪魔した人物、それがメディアという魔女である。しかし、だれがエンディミオンを愛していたのかは明記されていない。

このように月の女神とエンディミオンの恋の話には多様性があることがわかる。しかし、共通していることは、月の女神がエンディミオンに恋をしていたこと、エンディミオンは不老不死の眠りにつき、月の女神は眠っているエンディミオンを性愛の対象としていたことである。さらに、貞節であるべき月の女神の恋であれば、「秘密」であるべきことである。相互の愛であったかは、不明である。キケローの『トゥスクルム荘対談集』によれば、エンディミオンに感覚がなく、月の女神によって眠らされたのであれば、月の女神の一方的な想いによるのかもしれない。しかしながら、ピンコムは月がエンディミオンを愛したということは、エンディミオンもまた、月を愛したかもしれないという可能性を排除するものではない。事実、彼らは相互的な情熱を楽しんだと想定されていたと主張する（88-89）。ただし、神話などにおいては、エンディミオンの月の女神に対する想いは述べられておらず、月の女神のエンディミオンに対する想いが述べられているにすぎないのである。

このように、神話等におけるエンディミオンと月の女神の恋は、エンディミオンに対する月の女神の情熱が描かれることが多く、月の女神のエンディミオンに対する性的な欲望と「秘密の恋」であることが暗示されている。リリーの劇作『エンディミオン』の月の女神、シンシアとは異なる人物のように描かれている印象を受ける。しかしながら、リリーはこれらの神話に関する知識を十分持ったうえで、劇作を書いている。リリーの描くエンディミオンは、月の女神に想いを寄せるという神話とは異なる。あるいは、神話では描かれていない筋書きである。また、エンディミオンの月の女神に対する情

熱的な想いについても、「秘密」ではない。リリーの観客たちは、月の女神シンシアと眠っているエンディミオンの「秘密の恋」を覗く感覚で劇を観るつもりであったかもしれない。しかし、劇の冒頭から、エンディミオンがシンシアへの想いを話す姿を舞台で見たとき、まったく違う話であることに気づかされたかもしれない。次項では、リリーがどのように神話やキケローの作品を劇作『エンディミオン』に反映させているのかについて述べていく。

3. リリーのエンディミオン

『エンディミオン』と神話で描かれているエンディミオンの一番の違いは、彼が月神の恋の対象ではなく、エンディミオン自身が月神に恋をするという男女の立場が逆転しているという点である。さらに、エンディミオンが眠ることになった理由が劇の筋書きの上では明白である。エンディミオンを愛していたテルスの恨みを買って、彼女が依頼した魔女ディプサスの魔力によって、エンディミオンは眠りに落ちた。また、その眠りは、不老不死ではない。40年間、眠り続けたエンディミオンは、年を取り、容姿も変わってしまう。エリザベス朝の観客が知っているエンディミオンとは異なる点が多く描かれているリリーの『エンディミオン』ではあるが、神話、キケロー、オウィディウスの作品で描かれたエンディミオンと月の女神の関係を描いた箇所をリリーは自身の劇作に反映している。この項では前項で挙げた神話、キケロー、オウィディウスの作品がどのように劇作に反映されているのかを考察し、劇作との大きな違いについて論じていく。

まず、前項で引用したキケローの『トゥスクルム荘対談集』での一節が劇作にどのように反映されているのかについて考えたい。「死を軽いものとする人々は、死が眠りに酷似していると主張する」という一文は、死と眠りが同じであるかのように語られているエンディミオンの独白、さらには、劇中でエンディミオンの眠りが死と同等であるかのように表現されていることに影響を与えているのではないだろうか。2幕3場の最初はエンディミオンの長い独白で始まる。“No rest, Endymion? Still uncertain how to settle

thy setps by day or thy thoughts by night?” (2.3.1-2) という台詞から始まるエンディミオンの独白は長く、27行もある。この独白で語られることは、エンディミオンが7年間、シンシアを想うあまり、憂鬱になり、孤独となっているという状態とテルスへの罪悪感である。しかし、注目すべきは、この独白の終わりである。

ENDYMION. (…) No more, Endymion! Sleep or die. Nay, die, for to sleep it is impossible; and yet, I know not how it cometh to pass, I feel such a heaviness both in mine eyes and heart that I am suddenly benumbed, yea, in every joint. It may be weariness, for when did I rest? It may be deep melancholy, for when did I not sigh? Cynthia, ay so, I say, Cynthia! (2.3.20-27)

彼はこの台詞の直後に眠るのである。長い眠りに就く前のエンディミオンの独白は、自らが死ぬと確信した、死に際の独白のように聞こえる。彼の独白は眠りと死が同等のものであるかのような印象を受ける。さらに、エンディミオンの眠りが死に近づくことがディプサスの以下の台詞に表わされている。“Thou shalt sleep out thy youth and flowering time and become dry hay before thou knewest thyself green grass, and ready by age to step into the grave when thou wakest,” (2.3.37-40)。彼女の台詞は、エンディミオンの眠りが、本来、人間が味わうはずの年齢を重ねるという感覚も奪う眠りであることが暗示されており、「感覚を全くもたない彼が、いったいどうして心配するというようなことがあるだろうか。君は死の類似物である眠りもち、毎日それを衣服のように身につけ、死の類似物には何の感覚もないこと分かっているというのに、死に感覚がないことを疑うのか。」(76) というキケローの『トゥスクルム荘対談集』の一節を思い起こさせる。

また、エンディミオンのシンシアへの想いを知ったテルスはエンディミオンを殺したいほど憎んでいる感情と生きることも、死ぬこともできない状況へと陥れようとする。

TELLUS. Loath I am, Endymion, thou shouldst die, because I love thee well, and that thou shouldst live it grieveth me, because thou lovest Cynthia too well. In these extremities what shall I do? Floscula, no more words. I am resolved: he shall neither live nor die. (1. 2. 38-42)

しかし、テルスの最初の目的は、エンディミオンのシンシアへの想いを忘れさせ、自分に夢中にさせることであった。彼の本当の感情であるシンシアへの想いを無にして生きさせることであった。結果として、エンディミオンが長い眠りについたことが、テルスが望んだ生きるでも死ぬでもない状況となった。

ピンコムは前項で挙げた『ロドスのアポローニオス』の引用箇所をリリーが知っており、『エンディミオン』の登場人物である魔女のディプサス、シンシア、テルスが神話に描かれる魔女のメディア (Medea) との関連性を指摘する (105-06)。

“Not I alone then stray to the Latmian cave, nor do I alone burn with love for fair Endymion; oft times with thoughts of love have I been driven away by thy crafty spells, in order that in the darkness of night thou mightest work thy sorcery at ease, even the deeds dear to thee.”

(299)

と『ロドスのアポローニオス』において月の女神が語るように、彼女以外にもエンディミオンを愛した者がおり、エンディミオンの眠る洞窟に迷い込んだ者がいる。月の女神が「お前」と言っている対象は、魔女のメディアである。メディアが月の女神とエンディミオンの仲を魔法によって邪魔したことが明記されている。リリーの劇作『エンディミオン』での魔女はディプサスである。

ピンコムは『エンディミオン』のディプサスとオウイディウスの作品におけるメディアとの類似点として以下の例を挙げている。オウイディウスの『変身物語』²ではメディアがアイソンの父親のアイソンを若返らせる際に、魔法で眠らせ、彼をハーブのベッドに横たわらせる。これは、ディプサスがエンディミオンを月の堤で眠らせた場面と類似している。さらに、オウイディウスの『名婦の書簡』ではメディアナ有能力について“*She strives with the reluctant moon, to bring it down from its course in the skies, and makes hide away in shadows the steeds of the sun;*” (75) と語られ、それはリリーのディプサスの台詞に呼応している。ディプサスは“*I can darken the sun by my skill and remove the moon out of her course; I can restore youth to the aged*” (1.4.22-24) とテルスに自慢しているからである。しかし劇作では、シンシアによって、エンディミオンは若返る。ピンコムは、メディアナがアイソンを40歳若返らせたことと、40年間眠っていたエンディミオンがシンシアによって若返ったことは、リリーがシンシアにもメディアの特徴を持たせている主張する。そして、メディアの魔女としての善良な面をシンシアに不徳の面をディプサスの特徴に投影していると論じている。さらに、不実なアイソンとメディアの関係から、エンディミオンとテルスの関係において、テルスもまたメディアの特徴が反映されていると述べている (105-07)。

シンシアは月の女神、テルスはラテン語で地球 (the Earth) という意味であること、さらには、テルスは『エンディミオン』において、性愛を象徴する人物であることから、神話でのダイアナ (Diana) のイメージに重ねられる。古代神話ではダイアナは3つの姿の女神である。天上での姿は月 (Lunaあるいは the Moon)、地上での姿はダイアナ、貞節の女神であり、狩猟の神、そして地下の冥界での姿はヘカテ (Hecate)、魔女たちの女王だった。これら3人の女性の人物たちが『エンディミオン』ではシンシア、テルスとディプサスという女性たちの背景にあり、3人の女性たちはみな、メディアに結び付けられている。ここに三位格のダイアナがおり、メディアの話をとおして、リリーはシンシア・テルス・ディプサスの構成のアイデアにたどり着い

たのかもしれないとピンコムは論じている (106-07)。

一方で、ベリーもピンコムと同様に、シンシア、テルス、ディプサの3人について、神話で同一人物とみなされていることを論じているが、メディアとは結びつけられていない。しかし、リリーの魔法の利用は、彼のプロットの中で、中心的な要素として、だれにでもシンシアあるいはダイアナと魔力との関係を思い起こさせると述べている (129)。

しかし、ピンコムの論じるテルスとメディアとの結びつきについては、少し間接的な印象を受ける。メディアとテルスの台詞との類似性を考えたとき、オウィディウスの『名婦の書簡』での“she knows, by the enchanted blade with which she garners the baneful herb.” (75) という一文で魔法の葉を知っており、それと一緒に有害な薬草を集めるメディアの能力が記されている。メディアの能力は『エンディミオン』では、エンディミオンが眠った後のディプサスの以下の台詞に類似する。“The malice of Tellus hath brought this to pass, (…); for from her gather we all our simples to maintain our sorceries.” (2.341-45) ディプサスは、エンディミオンを眠らせる魔法を維持するために必要な薬草をテルスから手に入れた言っているからである。リリーはディプサスの上記の台詞を通して魔女のディプサスとテルスを関連づけているのではないだろうか。

シンシア、テルス、ディプサが寓意上で、同一であるのであれば、エンディミオンの眠りは、月の女神であるシンシアによってもたらされたという考え方が成り立つ。これは、キケローの「エンデュミオンを眠らせたと考えられている当のルーナ」(76) という一文も合致する。このようにリリーは、神話から着想を得て劇作を書いている。

寓意上では、シンシアによってエンディミオンが眠らせられたのであれば、エンディミオンはなぜ、眠らされたのだろうか。エンディミオンが眠らされた原因について、キャサリン・ベイツ (Catherine Bates) は宮廷人であるエンディミオンがおこがましくも、シンシアに対して性的な好意を寄せたことにより、罰せられたと述べている (87)。テルスに対する不実が原因で罰せられたという見方もできるが、エンディミオンと月の女神の神話で描か

れる「秘密の恋」という要素が全く感じられない。エンディミオンはシンシアへの想いを隠そうとしているが、隠しきれていない。もっとも、この作品の冒頭で、すでにエンディミオンは友人であるユーメニデスに打ち明けてしまっている。エンディミオンがシンシアによって眠らされたのは、シンシアへの想いを黙っていられなかったからではないだろうか。

リリーのエンディミオンは、シンシアに恋をしている。それは、劇の冒頭の1幕1場がエンディミオンと友人のユーメニデスの会話から明白である。

ENDYMYON. I find, Eumenides, in all things both variety to content and satiety to glut, saving only in my affections, which are so stayed, and withal so stately, that I can neither satisfy my heart with love nor mine eyes with wonder. My thoughts, Eumenides, are stitched to the stars, which, being as high as I can see, thou mayst imagine how much higher they are than I can reach.

EUMENIDES. If you be enamoured of anything above the moon, your thoughts are ridiculous, for that things immortal are not subject to affections; if allured or enchanted with these transitory things under the moon, you show yourself senseless to attribute such lofty titles to such low trifles.

ENDYMION. My love is placed neither under the moon nor above.

EUMENIDES. I hope you be not sotted upon the man in the moon.

ENDYMION. No, but settled either to die or possess the moon herself.

EUMENIDES. Is Endymion mad, or do I mistake? Do you love the moon, Endymion?

ENDYMION. Eumenidies, the moon.

EUMENIDES. There was never any so peevish to imagine the moon either capable of affection or shape of a mistress; for as impossible it is to make love fit to her humour, which no man knoweth, as a coat to her form, which continueth not in one bigness whilst she

is measuring. Cease off, Endymion, to feed so much upon fancies.
That melancholy blood must be purged which draweth you to a
dotage no less miserable than monstrous. (1.1.1-30)

劇の冒頭から観客は、すでに、エンディミオンがシンシアに恋をしていることがユーメニデスの会話でわかる。観客は、劇の冒頭の会話から、リリーの『エンディミオン』が自分たちの知るギリシャ神話等で知られているエンディミオンと異なっていることに気付いただろう。さらに打ち明けられた人物、ユーメニデスの反応は、月を恋する彼を異常であると言い、心配している。さらには、テルスにもエンディミオンのシンシアへの想いがばれている。テルスが舞台に登場する1幕2場の台詞は“Treacherous and most perjured Endymion, is Cynthia the sweetness of thy life and the bitterness of my death?” (1.2.1-2) であり、すでに、テルスと一緒に登場しているフロスキュラ (Floscula) にもエンディミオンのシンシアへの想いは知られている。さらに、エンディミオンの小姓であるダレス (Dares) が“Come, Samias, didst thou ever hear such a sighing, the one for Cynthia, the other for Semele, and both for moonshine in the water?” (2.2.1-3) と、ユーメニデスの小姓や宮廷の侍女たちに話している。エンディミオンが眠る場所も知られている。神話においては、シンシアがエンディミオンを隠しているかのようであったにもかかわらず。劇中でエンディミオンのシンシアへの想いを知らなかったのは、シンシア本人とシンシアが連れてきた学者たちのみだろう。つまり、この劇において、エンディミオンの眠りとシンシアへの想いと彼の長い眠りは誰もが知っていることである。本来、「秘密の恋」であるはずのシンシアへのエンディミオンの想いが、劇中では公けとなっており、常に話題の中心である。これが、エンディミオンが眠ることになった原因であるのではないだろうか。

シンシアの宮廷では、シンシアは宮廷人たちに黙ることを命じる場面が多い。シンシアの宮廷では沈黙こそが最良のポリシーである。シンシアは宮廷人たちのスピーチを監視し、ずけずけと話す者たちを黙らせる。3幕1場で

はシンシアが登場した後、すぐにテルスに“Presumptuous girl, I will make thy tongue an example of unrecoverable displeasure.” (3.1. 41-42) といって、砂漠の城へ幽閉させる。また、セミリにたいしても“Semele, if thou speak this twelvemonth, thou shalt forfeit thy tongue” (4.3.76-77) と言って黙らせている。まるで、検閲官の役割をしており、その役割こそがシンシア自らの威厳を知らしめるための方法である (Pincombe 95)。

劇の冒頭から始まるエンディミオンのシンシアへの称賛は、あまりにも長い。そして、2幕3場でエンディミオンが眠りにつくその直前まで描かれているのは、エンディミオンのシンシアへの恋心、そして彼を取り巻く周囲の反応である。エンディミオンは眠る直前まで、シンシアへの称賛をやめない。彼が眠りについた後、40年間の時が経過した3幕1場でようやくシンシアが登場するのである。エンディミオンは40年間も黙っている。

エンディミオンの眠りについて、ジリアン・ノール (Gillian Knoll) はエンディミオンの長い眠りこそがシンシアをエンディミオンの献身的な行為に注目させているという。エンディミオンはシンシアの恋ゆえに、自我を喪失するほど思い焦がれ、眠り続けることで死に近づくことになるが、結果として、シンシアを目の当たりにすることになる。エンディミオンはシンシアが彼の名を呼んだときに、自らのアイデンティティーを確保する。そして、シンシアが彼にキスをしたときに、身体的に彼女を所有するという願望に近づく (177)。しかしながら、エンディミオンが得たものは、女王が宮廷人へ与える「寵愛」のみである。

神話では、本来、月の女神であるシンシアが自分の性愛の対象としてキスをするためにエンディミオンをかくまい、隠れて会っていたはずである。また、シンシアとの関係性も相互的な愛情であった可能性も想定されていた。しかしながら、この劇におけるシンシアのキスはあくまで、エンディミオンを救うためであり、セクシャルな意味合いは全くない。ここが、リリーの『エンディミオン』と神話との大きな差である。黙るということがシンシアの注目を引きつけたこと、寓意上、シンシアがエンディミオンを黙らせるために眠らせたのであれば、リリーの目的は何であったのであろうか。その答えと

なるのは、ベリーの見解ではないだろうか。

ベリーはリリーの狙いは黙想する女王を描くことであり（114）、また、黙想する宮廷人を描くことも狙いであった（125-26）と述べている。その背景には、当時の政治上のイングランドの外交政策と宮廷内での派閥が関連している。しかし、本稿においては、神話との違いという論点にとどめたい。

4. 結論

本稿では、リリーの劇作『エンディミオン』とギリシャ神話、キケローとオヴィディウスの作品で描かれる月の女神とエンディミオンの恋について考察し、劇作家がこれらの作品をどのように劇作に用いていたのかを論じた。神話では、エンディミオンの眠りが彼自身の選択であったことが書かれている一方で、キケローの『トゥスクルム荘対談集』での一節では月の女神が彼にキスをするために眠らされたと記されている。このように、エンディミオンと月の女神についての記載は多様であることを確認した。また、月の女神とエンディミオンの恋は秘密であることが前提であり、秘密の恋の象徴であるかのようである。

さらに、ピンコム論を中心として、オウィディウスの作品でのメディアという魔女と劇中のシンシア、ディプサス、テルスの3人の女性の登場人物を関連付けていることを論じた。寓意上、この3人は同一人物であると考えられ、神話のメディアと関連付けられるとき、エンディミオンは、シンシアによって眠らされたという解釈が可能である。シンシアは、エンディミオンを眠らせ、目覚めさせ、若返らせることになる。シンシアがエンディミオンを眠らせた理由は、彼を黙らせるためであった。そして、劇作家リリーの目的は、黙想するエリザベスと宮廷人を描くためであるというベリーの論に同意する形で結論とした。

注

- ¹ 本文におけるオウィディウスの『エレジー』は Marlowe, Christopher. "Ovid's Elegies", *The Complete works of Christopher Marlowe*. Edited by Fredson Bowers, vol. 2, Cambridge UP, 1981. から引用している。
- ² メディアがアイソンを若返らせる話はオウィディウス『変身物語（上）』中村善也訳、岩波文庫、1981年。pp.267-73を参照。なお、ピンコムが指摘するメディアが草を敷いた上にアイソンの体を寝かせる場面は pp.271 を参照。

引用文献

- Apollonius, Rhodius. *Apollonius Rhodius*. Translated by R.C. Seaton, Harbard UP, 1912.
- Bates, Catherine. *The Rhetoric of Courtship: In Elizabethan Language and Literature*. Cambridge UP, 1992.
- Berry, Philippa. "Chastity and the power of interior spaces: Lyly's alternative view of Elizabethan court." *Of Chastity and Power: Elizabethan Literature and the Unmarried Queen*. Routledge, 1994, pp.111-33.
- Chambers, E.K. *The Elizabethan Stage*. Vol.3, Clarendon Press, 2009.
- Knoll, Gillian. "How to Make Love to the Moon: Intimacy and Erotic Distance in John Lyly's *Endymion*." *Shakespeare Quarterly*. Vol.65 Issue 2, Summer 2014, pp.164-79.
- Lyly, John. *Endymion*. Edited by David Bevington, Manchester UP, 1996.
- Marlowe, Christopher. "Ovid's Elegies." *The Complete works of Christopher Marlowe*. Edited by Fredson Bowers, vol. 2, Cambridge UP, 1981.
- Ovid. *Heroides and Amores*. Translated by Grant Showerman. Harbard UP, 1977.
- Pincombe, Micheal "Endymion: transitory things under the moon", *The plays of John Lyly: Eros and Eliza*. Manchester UP, 1996, pp.79-112.
- アポロドーロス『ギリシャ神話』高津春繁訳、岩波書店、2011年。
- オウィディウス『変身物語（上）』中村善也訳、岩波文庫、1981年。
- キケロー『キケロー選集』木村健治、岩谷智訳、12巻、岩波書店、1995年。

